

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：33941

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24660024

研究課題名(和文)ベビー・キューズの小児看護学教授方法のチャレンジ

研究課題名(英文)Challenges associated with methods of teaching baby cues in pediatric nursing

## 研究代表者

大西 文子 (ONISHI, Fumiko)

日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00121434

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：わが国では少子現象が加速しており、看護学生が子どもの理解を深めることは重要であるため、小児看護学の教育科目開講に伴う看護学生がもつ子どものイメージ及び子どもの表情(Cue)を読みとる力に関する経時的な現状を明らかにした。調査は平成25年4月～平成28年3月に行い、対象は東海地方の大学看護学部2年生120名のうち49名<回収率：40.8%>であった。最終まで協力が得られた11名では乳幼児のイメージや表情の読み取りは一般的な子どもの外見的特徴や活動を示すものが多かった。実習後は子どもを深く理解できるようになった半面、履修前より必ずしも子どもの肯定的イメージ及び表情の読み取りは高くなっていなかった。

研究成果の概要(英文)：The low birthrate of Japan is an accelerating phenomenon. It is important that nursing students deepen their understanding of children. This study sheds light on the image of children held by nursing students enrolled in Pediatric Nursing subjects and their ability to read children's facial cues over time. The study was conducted from April, 2013 to March, 2016 and targeted 120 second-year students from a nursing university in the Tokai district of Japan. Of the 120 target students, 49 participated (return rate of 40.8%). Of the 49 participants, 11 continued until the end and the study revealed many things about their image of infants and reading of cues in common children's expressions and actions. While, after the training, the students were able to understand children deeply, a positive image of children and their ability to read expressions were not necessarily higher than before the training.

研究分野：小児看護学

キーワード：子どもの理解 小児看護学 教授方法

## 1. 研究開始当初の背景

1) 看護学生は、小児看護学実習中、介入時の重要な視点として、学生個々の“子ども観”“育児観”“教育観”等を身に付けておくことは重要である(木村,1992)。しかし、合計特殊出生率 2.1(財団法人厚生統計協会,2010)という少子現象の影響を受けて、子どもに関わる専門職の養成教育機関では学生の子どもの理解が困難な状況にある。小児看護学では、実習評価と学生の子どもの観に関する研究(吉田ら,1993;大西,1998;釜島ら,2004;谷原ら,1993)で、子どもの理解と保育園実習の関連性を示唆し、子どもの理解を深めるために病棟実習前の保育園実習を導入してきた。また、子どもの理解に関係する要因として、学生自身の養育状況・きょうだい及び友人との関係性、子どもとの接触体験等の関連性を指摘している(後藤ら,1999;金谷ら,2008;林田ら,2007)。

2) 学生を取り巻く社会構造や環境の変化による影響を受け、学生の気質の変容やコミュニケーション能力の低下があり、学生の対児感情と子どもとの人間関係形成への研究の必要性が課題となり、学生個々の実習記録による質的研究(小代ら,2009)はあるが、小児看護学実習を行う学生個々が子どもの理解を深めるための具体的指導指針につながるような研究は見当たらない。

3) 子どもの理解を深めるための専門的な教育課程の影響を調査した研究は、小児看護学や保育学及び教育学分野において、専門的教育の実施前よりも後の方が子どもの理解が深くなっている(菅真,2002)。しかし、具体的にどのような科目と教授内容が子どもの理解に影響を与えているかの研究はないのが現状である。

4) そこで本研究では、子どものイメージを測定する C.E.Osgood の SD 法(Semantic Differential Method)(井上ら,1985)と、乳幼児が発する非言語的サイン(Cue)は人

種や言語の影響が少ないため(寺本,2003)、日本においても使用可能であると考えられる米国で開発された NCAST(Nursing Child Assessment Satellite Training)「Baby Cues(廣瀬たい子監訳,2008)」を用いる。小児看護学教育科目履修前後にこれらを調査し、学生個々における子どものイメージと表情を読み取る力の関係性の把握は、子どもの理解が重要な小児看護学の教授方法の開拓につながると考える。

## 2. 研究の目的

1) 看護学生がもつ子どものイメージや子どもの表情を読み取る能力の現状について、小児看護学教育科目の開講に合わせて経時的に調査し、各科目と学生の子どもの理解する能力との関連性を具体的に検討する。2) 各科目の構築・学習および指導内容・展開方法の検討により、看護学生の子どもを理解する能力を養うための具体的かつ新たな小児看護学教授方法を開拓する。

## 3. 研究の方法

1) 研究対象者：調査対象は、東海地方にある大学看護学部 2 年生 120 名(A 群)及び翌年の入学生 120 名(B 群)であり、小児看護学を初めて学習する者(除外基準は准看護師免許取得者)とした。2 回目以降の追跡調査は、同一の 120 名の 3 年次・4 年次を継続的な対象者とし、研究期間の都合により A 群のみとした。なお、本研究では、経時的追跡中における脱落者発生の危険性及び研究目的が現状把握であるため、研究結果の信頼性を高めるため、観察集団は同一集団ではなく、複数の学年とし、A 群、B 群に設定した。

## 2) 研究期間・調査手順

研究期間：平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月。調査手順：調査は 4 回行った。一回目の調査は、2 年次の小児看護学の授業の受講前、学生全員に研究参加協力依

頼と調査日時の告知後、調査日に依頼した。科目担当者と本研究者が同一なため、本研究者以外の者が調査日、対象者全員に同一場所の集合形式で調査票類一式を配布し、調査方法や倫理的配慮及び調査票の回収日・回収方法等を説明し、実施した。以降、2～4回目は、2年次の小児看護学概論・保健受講後(2回目)、3年次の小児看護学：健康障害と看護及び小児看護学：小児看護技術・看護過程演習受講後(3回目)、4年次の小児看護学実習受講後(4回目)に、研究の継続参加協力依頼を行った。どの調査も、自由回答欄を一部含む選択回答肢から構成する自記式質問紙を用いた。調査票の回収は、学内設置の回収箱(施錠有)への投函とした。

### 3) 調査項目

子どもの理解に影響する因子は、先行研究より自記式質問紙を作成した31項目(対象者自身の養育状況、過去及び現在の子どもの接触体験、きょうだいの有無等)から構成した。子どものイメージは、子ども観の測定に有効であるとされている51組の形容詞について7段階の評定尺度及び先行文献(井上ほか, 1985.; 木村, 1992.)を参考にして、37項目の形容詞を用い、尺度得点にはSD法を用いた。子どもの表情を読み取る能力の把握は、「Baby Cues」調査の児のコミュニケーション Cue を用いた。児のコミュニケーション Cue は、強い親和(11項目)、弱い親和(8項目)、強い嫌悪(22項目)、弱い嫌悪(43項目)の4分類から構成されている。項目数が多く、データの妥当性を低下させる可能性が考えられたため、4分類の比率に極力近似するよう、簡易的に、強い親和2項目、弱い親和1項目、強い嫌悪3項目、弱い嫌悪5項目の計11項目から再構成した Baby Cues

カード(写真)を調査に用いた。学生には、選択した11枚の写真(Baby Cuesカード)を無作為に並べて、11枚のカードがいずれの Cue を示しているのかを解答用紙に記載してもらった。なお、Baby Cuesカードの信頼性は、NCASTの正解率85%以上が実践レベルでの合格点であるため、本研究の11枚の写真の選択においてもこの基準を採択した。カードの使用許諾は、本研究開始時、分担者が2012年JNCAST講習会修了時に部分的使用する場合は書面での使用許可の不要の説明を受けていたが、再度NCAST研究会へ確認した。

### 4) 分析方法

1回目の調査では、回収された125名(回収率:A群49名<40.8%>、B群76名<63.6%>)を分析対象とした。

どの調査の看護学生による子どものイメージや子どもの表情「Baby Cues」を読みとる力は、経時的な現状を明らかにするために、各質問項目ごと及び正解率の結果について、それぞれ集計を行い、基本統計量を求めた。なお、各科目と学生の子どもの理解する能力の分布を比較検討するため、1回目のデータをベースラインとし、その後の科目の履修前後の子どものイメージや表情を読み取る能力については、平均値を求め、調査時期ごとの変化を観察した。分析の際は、SD法は既存の尺度であるため内的整合性は保証されており、間隔尺度として取り扱った。また、4回まで調査協力を得られた11名については、記述することで検討した。A群、B群ともに、関連因子を検討するための人数を得られず、また、多くの項目において、正規性を成さず、離散データであったため、統計学的検定は行わずに、その内容や変化について観察

し、記述することとした。特に、B 群では、養育環境や子どもとの接触体験など 1 回目の調査での有効回答率が 20% を満たさないものもあり、B 群の属性を同定することが困難であったため、B 群から得たデータ分析は、子どものイメージと表情を読み取る能力のみ集計し、検討の際は参考値とした。基本統計量の計算については、SPSSVer.19.5 及び Microsoft Excel2010 を使用した。

#### 5) 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字豊田看護大学研究倫理審査委員会の承認を受け、実施した(承認番号 2501)。研究課題名、期間、目的、方法、対象の擁護、研究参加の自由意思の尊重、参加の任意性とその同意の撤回、予想される危険性及び不利益が生じないこと(特に、科目の成績評価には全く影響しないこと)、等を明記した文書とともに、依頼時には研究者が科目担当者となっているため、小児看護学の単位認定に携わらない者が口頭で説明した。また、1 回目の調査時、学生は 19 歳の未成年者であるため、学生本人とその保護者に対して説明し同意を得た。個人情報保護のために、個人識別番号(ID)は無作為な数字を入れた封筒を糊付けし、学生個々が選択した封筒の番号を最終の調査まで同一とし、連結可能とした。

#### 4. 研究成果

##### 1) 結果

##### (1) 対象の特性と経時的変化

1 回目の調査では、A 群の協力者数は 49 名であり、2 回目で 28 名(脱落率 42.9%)となり、3 回目 28 名(脱落率 42.9%)、4 回目 15 名(69.4%)となった。

1 回目の調査では、きょうだいのいる者は 90%以上おり、自分が一番年上または年下という者が 77%近くを占めた。同居の家族人数は 4~5 人が 70%近く、子ど

もの頃の居住環境は住宅地が 80%近くであった。B 群では、1 回目の調査では 76 名であり、2 回目で 12 名(脱落率 83.6%)、3 回目 18 名(脱落率 75.3%)となった。

どの背景も A、B 群ともに、1~4 回目(B 群は 3 回目)の調査で、ほぼ近似の分布を示し、調査協力者の背景の分布も調査時期で大きく異なっていた。

##### 2) 対象の子どもに関する体験

1 回目調査の A 群は、幼児と遊んだり世話をするなどの接触体験があると回答した者は 50%以上を占めた。赤ちゃんと遊んだことがない者は 21 名(42.9%)、赤ちゃんの世話をしたことがない者 26 名(53.1%)と半数以上を占めた。子どもの年齢の低下し、接触体験のある者は少なくなる傾向が認められた。子どもの頃に身の回りの世話や遊んでくれた人は、多くが母親であり、両親以外の祖父母が 25%で次に多かった。

一方、子どもの頃で思い浮かぶ年齢は幼児期と回答した者は 37 名(75.5%)で学童期よりも顕著に多かった。子どもの頃の自身の体験は、遊んだ場所を居室と回答した者が 42 名(87.5%)と最も多く、次に公園 41 名(85.4%)であり、屋内外で遊んだ体験であることが伺えた。空き地や道路で遊んだことがあると回答した者は、公園や居室での回答者数よりも少なかった。遊びの内容は、おもちゃ遊びや公園での遊びなどの運動を伴う活動は体験があると回答していた者は半数以上であった。しかし、玩具作りなどの創作活動は 20 名(41.7%)と最も少なかった。

##### 3) 対象の乳幼児に対するイメージ

1 回目の調査では、乳幼児が好きと回答した者は A 群 38 名(77.6%)、B 群 64 名(86.5%)であったが、世話に関心がある・一緒にいると楽しいなど「好き」と

いう気持ち以上の積極的な気持ちはA群B群ともに80%以上が回答していた。

次に、SD法による乳幼児のイメージは、A群では、37項目中、平均が4点より高かったものは26項目、3~4点のものは8項目、3点未満3項目であった。上位の項目は、やわらかい、生き生きとした、元気な、など子どもの外見的特徴や活動を示すものが多かった。中位の項目は、のんびりとした、きれいな、清潔な、勇敢な、など子どもの成長に伴う生活や行動を示すものが多かった。下位の項目は、思いやりのある、広い、鋭い、速いなど、成長発達に伴う精神活動や運動能力に関するものが多かった。B群は、平均が4点以上ものは26項目、3~4点は7項目、3点未満は4項目であった。

#### 4) 乳幼児の表情の読み取る対象の能力

Baby Cuesの1回目の調査結果は、A群では、写真10・写真6の正解率が80%以上と高く、写真1・写真4は25%未満となった。B群もA群と同様であった。

5) 対象の乳幼児に対するイメージの経時的変化：履修授業で得た経時的変化におけるA群では、どの項目も履修科目の進行に関わらず、顕著な変化は認められなかったため、4回目まで継続的調査の平均点を図1に示した。

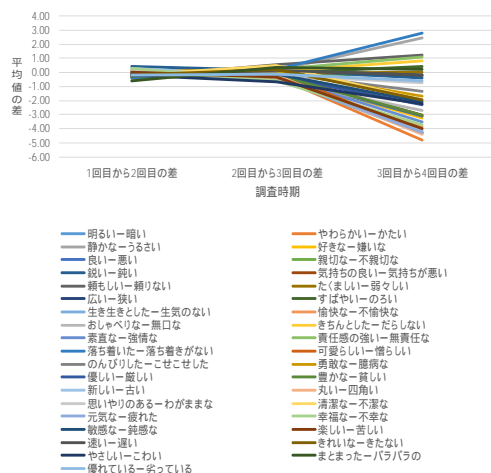


図1. 上級生A: 学生の乳幼児に対するイメージの経時的変化における平均値の差の変化

#### の経時的変化

A群では、4回の調査の間の正解者の割合の分布をみると、大きな変化はみられなかったため、次に、A群における正解者の割合の経時的変化をわかりやすくするため、その差を図2に示した。

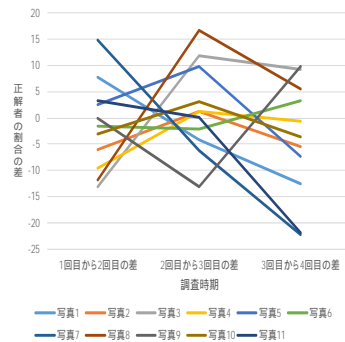


図2. 上級生A: 学生の乳幼児のサインの読み取りに関する学生の能力(正解者)の経時的変化の差

#### 【考察】

1) 現代の看護学生による子どものイメージや表情を読み取る能力の現状：看護学生は、子どもを「好き」であり接触が密になるとその積極性が若干低下する一方で、世話に関心がある者も多く積極的な関心を持っていることが示唆された。また、子どもの外見的特徴や活動については肯定的なイメージを持っており、子どもの成長に伴う生活や行動・精神活動や運動能力に対しては否定的なイメージをもっていることが示された。これは、子どもとの接触体験が少なく、実在する子どもについて、表面的にのみ捉えていることが推察された。さらに、子どもの表情を読み取る能力は、正解率85%以上の写真は1枚と正解率が低い写真2枚であったこと、強い親和と強い嫌悪は比較的正解率が高く、弱い親和と弱い嫌悪が比較的正解率が低いことを合わせて、子どもの表情を読み取る能力は最初から備わっているわけではなく、学習によって獲得し、発展させていく能力であることが示された。なお、これらの能力が、子

子どもとの接触体験との関係性は今回調査はしておらず、また、それらが多かった世代の能力との関係性も明らかにはされていないため、子どもとの接触体験と表情を読み取る能力を直結させて考えることは今後の研究の発展に期待される。

2) 小児看護学の教育科目の学習内容がもたらす、子どものイメージや表情を読み取る能力の変化

本研究の結果では、小児看護学の科目履修の進行に伴い、子どものイメージは、4回目では、1回目より減少や増加をしており、座学の授業によって必ずしも高くなるというわけではなく、「好き」という感情や世話に関心があるなど初学者が持つイメージが、実習を経験した4回目では健康障害をもつ子どもを受け持ち、接触が密になり、一緒にいると楽しいといった、より具体的な深いイメージを持ち、小児の本質的な姿を捉えられるようになったと思われる。

子どもの表情を読み取る能力の経時的変化は、大きな特徴を見出すことはできなかった。しかし、正解率が高いものは、4回目まで高い割合で、正解率が低いものは低いままで推移することから、弱い表情を読み取る能力に対し能力獲得のための学習が必要であり、即座に獲得することが困難であることが推察された。弱い表情を読み取る能力の獲得と強化の積み重ねが重要であることが示唆された。今後、小児看護学において、子どもの弱い表情が読み取れるためのリアリティな教材等の教授方法の工夫が必要であろう。

<引用文献>

木村留美子(1992): 子ども観の研究(1) - SD 法による短期大学生の子どものイメージについて - , 日本看護科学会誌, 12, No1, 50-56 .

菅眞佐子(2002): 子ども観の形成に関

する研究 - 専門教育を受けることで子どもイメージはどう変化するか - , 滋賀大学教育学部紀要教育科学, NO. 52, 85-94 .

井上正明, 小林利宣(1985): 評価技法としてのSD法の意義とその用い方(その2) - 形容詞対尺度構成の方法 - 指導と評価, 31(10), 41-44 .

廣瀬たい子監訳(2008): 養育者/親-子ども相互作用ファインディングマニュアル(日本語版), Sumner, G., & Spietz, A. (1994). NCAST-AVENUE. NCAST 研究会

5. 主な発表論文等  
〔学会発表〕(計 2件)

山田恵子, 大西文子, 野口賀乃子(2016): 小児看護学履修過程における学生の子どもへのイメージおよび子どもの表情の読みとり, 日本小児看護学会 第26回学術集会, 別府市, 平成28年7月23・24日. <発表予定>

大西文子, 山田恵子, 野口賀乃子(2016): 看護学生が子どもの表情を読みとる力を養うための小児看護学教授方法の検討, 日本看護学教育学会 第26回学術集会, 東京, 平成28年8月22・23日. <発表予定>

〔その他〕

日本赤十字豊田看護大学学術情報リポジトリ「HUMANITY」

<https://rctoyota.repo.nii.ac.jp>

Permalink

<http://id.nii.ac.jp/1129/00000171/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者 大西文子(日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授)

研究者番号: 00121434

(2) 研究分担者

増尾美帆(現: 関西福祉大学・看護学部・助教、平成24年~25年、前: 日本赤十字豊田看護大学・看護学部・助手)

研究者番号: 30626198

神道那実(日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師、平成24年~26年)

研究者番号: 90434638

山田恵子(日本赤十字豊田看護大学・看護学部・講師、平成26年~27年)

研究者番号: 90571323

野口賀乃子(日本赤十字豊田看護大学・看護学部・助手、平成26年~27年)

研究者番号: 20743420